

平成2年度放送利用の大学公開講座番組制作報告

民間放送教育協会プロデューサー 井出 定利

今年度は印象に残った3本のテレビ番組にふれることによって報告にかえたい。

「食—人間生活とのかかわり」

名古屋大学—名古屋テレビ放送

—ワイドショー的なスタジオの広い使い方、視聴者の理解を助ける工夫＝演出、などについて

私がかねて、一般にスタジオをもっと広く使っていただきたい、と局側の担当者をお願いして来た。公開講座のスタジオセットは、多くはすわったままの担当講師、聞き手のアナウンサー、図表のためのフリップ台というのが通例であった。今でもそのパターンが多い。講座番組は内容から見てある程度仕方がないにしてもやはり工夫は欲しい。何故なら、公開講座の演出とは何かと問われれば、それは視聴者の理解を助けるための工夫である、と答えることができよう。スタジオはそのためのいい空間である。

この番組は、講師が、ある時はすわり、ある時には立って標本セットの前で説明するなど、ワイドショー的な手法で楽しいものとなった。テーマにも助けられたが一つの努力の成果と言えよう。視聴率も好調であった。

「沖縄の自然—地形と地質—」

琉球大学—沖縄テレビ放送

——— 大学の授業でも使える内容を受講生はどう受けとったか

私が視聴した作品は第9回「大陸の一部であった琉球孤」（主任講師の氏家教授担当）と第7回「沖縄トラフの陥没」（木村教授）であったが、前者が考える問題を提起している。それは講師の氏家先生が専門用語を駆使して、視聴者のレベルにとらわれることなく一気にひとつのことを語っていることである。私はこれを見終ってまず感じたことは大学の授業に使うにはとてもいい番組ではないか、ということであった。

しかし一般の人々には大変難しかったのではないかと。欠点もある。映像カットが非常に早いこと、従って詰め込みのきらいがあること、大学の学問レベルと視聴者のギャップを埋める工夫＝演出（例えばスタジオに沖縄の地質模型などを造って置く、等）がもう一つ不足していること、などがあげられる。

にもかかわらず私はこの番組に対しては肯定的である。確かにスクーリング（1/20（日））の出席者からも難しかった、という声が多かった。再視聴したいという声も又多かった。しかし全体的には、このレベルの高い、専門用語の多い番組に対して肯定的な発言が多かった。それはいつに、事例としての映像が豊富であったことによると考えられる。地殻変動をくり返して来た地層の典型的な事例が氏家先生の手によって見事に展開されていた。

つまり換言すれば、この番組は、よく吟味された映像が豊富ならば、大学の講義のレベルを落とさずにそのまま番組化しても一般の視聴者をひっぱって行くことができる、或いはまき込むことができる、ということを示してくれたように思う。すぐにこの考えを一般化することは危険であるかもしれないが映像メディアとしての可能性を示唆してくれたように思う。

「木からのメッセージ」

高岡短期大学—北日本放送

—— 明快なすじ運び、視聴者の思考をどこへ追い込んで行くか、などについて

第4回「千年を支える」を視聴させていただいた。最後のシーンに感動を覚え、番組で言わんとしていることがよく理解できた。この成功もテーマによるところが大きいと思われるが、作品自体に目を向けて見ると、明快なすじ運び（構成）と、そのすじによって最後に視聴者の思考をどこへ追い込んで行くか、という演出プランの良さが感じられる。

映画や放送番組の成功には、「単純明快なテーマ、斬新な手法」ということがよく言われる。テーマや構成の手法は単純明快の方がわかりやすい。この番組も①木材の構造—強くて軽い②更に強くする木組み工法—△や□（四角）にすると木は強くなる③間伐材を使ったある建築事例、と構成は単純で無理がない。そして、①と②の内容が③の事例に流れこんで感動をもった終りとなっている。視聴者は制作者側のねらった着地点に快く追い込まれて行く。楽しい番組であった。

高岡短期大学の番組は30分番組である。今年度から30分化の地区も多くなったので、この問題にも簡単にふれたい。

30分の番組づくりは45分よりも大変難しいであろうと私は思う。これが普通の番組だったらそんなことはないと思うが、大学講座のように体系的な内容で理解を目的とした番組は、時間が短くなればなるほど難しいと考えられる。45分から15分、内容を短縮という考え方では失敗する可能性が強い。その点で今年度の高岡短期大学の番組は参考になる点があるように思われる。例えば、明快な論理構成と、ただ1点への思考の追い込み（流れ込み）といった点で—。